論　説

景　観　論
ー英彦山とその山麓の場合ー

白　石　直　典*

福岡市側から八木山有料道路のトンネルを抜けて筑豊側に出ると，視界が180度広がる。山なみが繰り返される彼方，立ちはだかるように英彦山の南岳，中岳，北岳が聳え，さらにその左側に鷹巣一の岳，二の岳，三の岳の特徴的なビュート（堅固な岩石の部分が島のように残ったもの。浸食残丘）の続くのが遠望できる。さらに進んで国道201号の烏尾峠を越すと，その眺めはいっきょに迫力を増してくる。一方，直方方面遠賀川下流から，さらには周防灘方面からも遠望できるが，やはり烏尾峠を出た辺りからの眺望がこの山のととのった全姿をよく把握できるようだ。英彦山にかなり近い下中元寺の盆地に入ると，その山容の一部が急峻な様相を現し始める。しかしそれもつかの間で，すぐさま前の山にさえぎられて見えなくなる。近距離となって最もよく見えるのは，添田の町から上津野に向かう途中，突如として南岳から左側に続くビュートまでの全容が現われるときである。しかし，位置的に三つのビュート軸と並行状になるためか，さしものビュートも思いのほか，まが抜けた感じとなる。しかしそれも少し進むとたちまち見えなくなる。古代人はこの山の怪奇な風景に惹かれて谷川を上りつめ，ようやくこの山腹に辿り着いたのだろう。古代人が英彦山に畏敬の念を抱いて眺めた風景はこのようなものであったのだろうか。

さて，平地からこの山の全姿を眺望できる場所を見つけることは地元の人ならいざ知らず，一般的にはなかなか容易ではないことがわかった。しかし，どうしても間近かに最もととのった全容を見なければ話にならないと思い，いろいろな場所を検討し，町役場の人にも聞いた結果，上中元寺の東南に聳える宝が岳からの眺めがよかろうということになった。そこで，宝が岳（高さ489メートル）にとりつきやすい落合の集落から登ることにした。昔は道があったらしいが，今は高いブッシュの連続で悪戦苦闘の末ようやく登り着いたが，杉木立ちのため望める場所がない。やれやれとあきらめかけていた時，なんとかカメラの視野ぎりぎりに見える空間が見つかった。あれほど気難しいと思っていた山が適度な距離で全容を現わしてくれたのである。英彦山とその山麓の景観についてを主題とするからには，どうしてもその全容をできるだけ近くで見たいが一念で，このような重労働をすることになったのであるが，これでは実のところ誰にでも見られる景観の紹介にはならない。換言すれば，一般の人たちは，この山がどのような形をしているのか分からないままにこの山に入っているのである。ここで私は折角苦労して登ったからにはその感想を述

＊（財）九州環境管理協会顧問（元理事）

べてみたい。もしも平地からこの山の全容が見えた場合，三つのビュート（これは上津野の路上のごく限られた場所からしか見えない）はあまりにも意志が強過ぎて，誰に対してでも安らぎを覚えさせるような景観たり得るかどうかである。こう考えると，やはりこの山は平地のどこからでも見え難いことの方がむしろ幸いしているような気がしてくる。次に国民宿舎とテニスコート場の屋根と思われる白い大きな建物が目に入るが，これだけは緑一色の霊山ともいえるこの山の雰囲気に違和感を与える。これらはここからではなく，この現場の近くを通る度にも，特にテニスコート場の屋根であるのか無機質の巨大構造物に対しては，常日頃から不愉快な念を覚えている建物でもある。

英彦山の全容

最近は環境アセスメントが広く実施されるようになり，その過程で景観問題が話題になることが増えてきた。この問題の難しさは，最終的には人間の感覚によるということに尽きる。しかし，これを都市計画面から眺めてみると，とかくえらい建築家によってその計画が先導される例が多いこと。すべての建築家がそうだとはいわないが，彼等は建物を造ることはプロであっても，とかく隣や周囲の景観のことまでは念頭にないようだ。注目を集めた近年の京都市，奈良市，大津市などにおける例を見ればそのことがよくわかる。例えば歴史のまち京都では，市内に某ホテルの高層建築計画が発表されたので，これを阻止しようとする人々は，「民活・規制緩和という名のもとで，これまで京都の歴史景観は随所で破壊されてきたというのに，今回の計画は応仁の乱以来の危機である」とアピールした。しかし，結局のところ“総合設計制度”なる法律によって高さ60メートルのビルが出現してしまったのである。この制度とは，ビルの敷地の一部に公共の空間を設ければ，その代わりに容積率や高さ制限が緩和されるというもので，このビルの場合，建物の前面に僅かな空き地を作る代わりに，その10倍の床面積を余分に積み上げられるというトリックまがいのやりかたで，60メートルという高いビルが造られたのである。著名な建築家たちの先導のもとに，東京はこの制度によって超過密都市となったが，これが京都にも導入されたのである。大資本の思うつぼである。奈良においても市域の建築物の高さが大幅に緩和された。千数百年来守られてきた古都の景観はこれによって今や確実に破壊されつつある。北九州市門司区でも同様な話題があるようだ。このようになった原因は，都市計画における景観というものの意味合いがわが国では十分に理解されていないということに尽きる。特に京都や奈良などにおいては景観そのものが

文化財であるという認識が必要であり，したがって地域の環境を構成している中に建築もあるという思想が必要である。昨年，私はこれらの場所に行ってみて茫然としたのである。東山の景観をだいなしにしたこれはまさしく犯罪的行為であるとみた。日本という国は，どうしてこうまでも開発と景観保護という問題に対してのフィロソフィーの確立がなし得られないのだろうか。

パリにエッフェル塔が出現したとき，モーパッサンは，「自分が死んだらあの塔が見えない場所に葬ってくれ」と遺言した。その遺言は忠実に守られている。私が住むまちにも，西海岸埋め立て地に，あれよあれよという間に高いタワーが出現した。それは巨大な注射針を天に向けて突き立てたかっこうである。ただでさえ雑然とした一帯に，あれでは闘争心をあおるようなものでなんとも騒然たる風景となってしまった。私もモーパッサンの心境である。このまちには数年前，景観賞なる制度ができた。そして，単一の建物の表彰が続々と行われ始めた。その後の動向をみていると，これはもう景観賞ではなく建築賞そのものである実態に失望したものである。

ところで，あの建物は周囲の景観によく溶けこんでいるといった表現が用いられることがある。この表現について考えてみた。溶けこむとかなじむとかいうのは，結局のところ時間に比例して人間の目が慣れてしまうゴマカシであるように思う。当初，ムネクソが悪いほど憎んだエネルギーも時間が経てば鎮まってしまうということではないか。残念ながら，景観の人に対する影響度合いは，ものによっては時間と逆相関を示す一面がある。他の土地の人がこのまちにやってきて，初めてこの景観を見て，これはよくないといっても，そのまちの人はすでにその景観に対して免疫体になっている。私もかってこの言葉を使ったこともあったが，今考えると恥ずかしい。溶けこむということは実はこのような現象を意味しているわけで，これは不幸なことなのである。私はパリに行って初めてエッフェル塔を見たとき，このまちを造ったオスマン男爵に，これは申し訳ない風景だなと同情した。これは万国博の時に生まれたものであるが，その後の歴史をみていると，大イベントの後には想像もしないような巨大な構造物や奇妙なものが有無をいわさずに生まれるもののようである。

次に構造物の色である。これは形と共に重要な問題である。最近は景観工学という言葉がよく用いられるが，この言葉を聞くと私は大変慎重にならざるを得ない。色とは現代の人間に対して突然と目の前に出現したのではなく，日本人は昔から四季のいろあいを歌にするなど色に順応して生きてきたのである。柳田国男は定本柳田国男集，第24巻138頁～139頁の中で，日本人の色彩観について「我々は色に貧しかったといふよりも，強ひて富もうとしなかった形跡があるのである。是が天然の色彩の此の通り変化多き国に生まれ，それを微細に味わひ又記憶して，時節到来すれば悉く利用することの出来た人民の，以前の気質であったといふことは不思議な様であるが，見方によっては是も我々の祖先の色彩に対する感覚が，つとに非常に鋭敏であった結果とも考えられる。」と。すなわち，日本人は色彩の変化の多い国に生まれ微細に感じとる能力に優れていたと教えている。そして「各自は樹の蔭のやうな稍々曇ったる色を愛して，常の日の安息を期して居たのであった」とのべている。そして日常生活で「ハレ（晴れ）

とケ（褻）」という対照的な二つの概念を示したが，このことについて，福田アジオは“柳田国男の民俗学”（吉川弘文館）の中で「日本人は以前は原色の色鮮やかなものは衣類や装身具には使わなかった。白い色も使わなかった。ところがハレには白，赤その他の原色を使用した着物を着たり，空間も時にはそのような色で飾った。そのうち，多くの色が何時でも使われるようになり，区別を無くしてしまった中で，白色などはその感覚を今によく伝えている。神官や巫女の服装，婚礼の白無垢等に示され，白色がハレの色であることを教えてくれる」と論述している。以上のように，柳田国男は民俗学的見地から，日本人の色彩感覚は非常に鋭いものであり，樹の陰のような曇った色が安息の色であり，そして原色は特別な場合以外は使わなかったのだといっている。時代が進み，人が画像表示面に首漬けになればなるほど安息の色が必要となると思われるのに，原色をまち中でも野山でもハレの日でなく常時これでもかと安易に見せつけている現在の傾向は，精神不安定・それは人間の感性の消滅としかいいようがない。

ところで先に福岡のまちには味がないことをのべたが，その中に二つの建物の色だけは私を救ってくれる。一つは福岡県庁舎であり，もう一つは福岡銀行本店である。この二つはどちらも建築家黒川紀章氏の設計であるが，この建物の色は彼が提起する“利休ねずみ”グレーである。“利休ねずみ”とは，緑がかったねずみ色であり，江戸時代の流行色なのである。現代建築に東洋思想を求めるこの人の建築とその色は注目に値する。このように柳田国男は日本人が早くから自然と共生できる色に鋭敏な感覚を持っていたことをよろこび，黒川紀章氏（私は以前からこの人は開発推進派ではないかと思っていたが，実際にこの人が設計する建築やまたその色については注目に値するものを感じている。）も日本人がはぐくまれてきた色を求めたのである。こうしてみると，雑多なまち中や海浜ならばいざ知らず，緑に包まれた美しい英彦山の景観に，白い原色の大構造物がふさわしくないということがわかってもらえるであろう。

さて，人は昔から広い平野のまん中に住まず，多くは自分の周囲を山がとり囲む盆地のしかも山の麓に居を構えたというが，このことは柳田国男が“地名考察”（角川文庫）でのべているとおりである。農耕以前には，人は山に分け入り狩りをしたが，その場合でもなるべく谷川の近くを拠点とした。英彦山とその山麓におけるズベイガ原遺跡，柳原遺跡，上中元寺の御手洗遺跡，中元寺の金ノ原遺跡，などの縄文遺跡がこのことを示唆している。そして現在見られる今川に沿った津野の集落，一の宮に沿った一の宮の集落，そして彦山川の上流域新倉川や駒啼川が合流する落合（落合とは，二つの川が合流するところ）の集落，また中元寺の集落などいずれもがそうであるように，これらは山懐に抱かれた谷型や盆地型であり，柳田国男が述べる母性的な自然景観そのものである。また，樋口忠彦氏は“日本の景観”（ちくま学芸文庫）の中で，「日本人の棲息地の景観が，山の辺かつ水の辺の地を偏愛するいかに母性的な景観であるか…」と論じ，これから景観を凸型景観と凹型景観の組み合せで考えていくことを述べた。そして日本の景観に凸型の意志的景観がなかったわけではないとして，神の宿る神奈備山，山の辺に突出した国見山や平地の独立丘である男山（男性的な意志）の上に祭られた神社や近世城郭などの例をあげ，これらを凸

型景観←→意志のイメージ→男性のイメージとしている。これに対して凹型景観←→休息のイメージ→女性のイメージを導いている。そこでこれを英彦山について考えてみる。まず宝が岳からの景観である。こんもりと盛り上がった南岳，中岳，北岳の厳しさから左に続く三つのビュートの全容姿は，たとえば九州中央部の九重山や阿蘇山など多くの人から親しまれている優しい景観とは明らかに異なる。英彦山は“男の山”と誰かがいったがまさしくその強い男の意思は，厳しい山容のその懐に入ってみても，たとえば銅(かね)の鳥居から中岳に登る石段のどこまでも続く登山道や，またかって美しさを誇った千本杉の美林帯も，平成3年の二つの台風で無惨にも広漠たる景観と化してしまい，外観からもまたその中に佇んでみても安らぎを与える景観とはいい難い。これは樋口氏のいう凸型景観→意思のイメージ→男性のイメージに相当する。

次に目を英彦山の山麓に転じてみよう。津野，一の宮，落合，中元寺の各集落についてみると，津野と一の宮は谷型，落合は谷型と盆地型の混合型，中元寺は盆地型である。これらはいずれも凹型景観であり，まさに母の胎内に入ったような安息型といえよう。以上で英彦山とその山麓の景観についてひととおりの展望をおこなったが，それはいわば地勢的マクロの景観であった。

ところで私は昨年の夏，上津野の高木神社の前の木陰で休んでいたら，前方の松崎家の背後に“ひこさん…”と彫られた石柱が目にとまった。ところがそれが3メートルくらいの石垣の上にあるので“ひこさん”の字は読めるが，その下はツタがからみついてわからない。そこで松崎氏の家から梯子を借りてきてそれに登り，ツタや下草を除いたら“ひこさんまち”と現れ，上部に右方向の矢印が刻まれていた。町史などで，17世紀に“英彦山町”が出現していたことは知っていたが，現実に“ひこさんまち”という道標を目の前にしてみると，今は滅んだ昔がしのばれていとおしくなる。以後，私は“英彦山町”とせずに“ひこさんまち”と書くことにした。

私が英彦山に魅せられた始まりは，この“ひこさんまち”に室町時代後期から江戸時代初期にかけて作られた古庭園が数か所も存在していることを知って以来である。以後，これは“ひこさんまち”の景観に寄与する大切な材料であると位置づけていた。それから程なく私は九州各地の庭園の写真集を出版したが，その中に，“ひこさんまち”から7か所の庭園を選出したのである。そうするうちに，私はこの“ひこさんまち”の佇まいが気に入り始め，何とかならないものかと考えるようになった。それは滅びゆく美を再現しようというのではなく，人間性の失われゆく都会生活者の安らぎの場としてここの美しい自然を，もっと利用できないものだろうかということであった。その一つに小学生の中短期のホーム・スティや，小規模の公的宿泊施設（現在の国民宿舎の場所は，全体の探勝基地として場所がやや不便という声を，二，三の宿泊者から聞いた）の設置である。一方では国の重要伝統的建造物群保存地区の指定のための運動を考えてもみた。ちょうどその頃，私は機会を得てイタリアの建築を撮る旅行をしたが，その中で中世期以前からの山上都市の6か所を回った。そこで山上都市とはこういうものだったのかとこれまで見たこともない異色の光景に目を奪われ続けたのである。紀元前から人々は，平野で害虫などによる伝染病に悩まされ，高地に都市をつくっていったが

（このあたりの話は中元寺の金ノ原大地の由来とよく似ている），その町がそのままの姿で現在に至ったのである。無人に近い広い平野の中に標高300～500メートルの山や台地が聳え，その山上に数百人から万人単位までの人口を持つまちが広がっている。この地形を九州近辺でわかりやすくたとえてみよう。国道210号を大分県日田市から湯布院方面に向かい，玖珠町が近くなると，右手前方に台形の山が見えてくる。伐株山（高さ685メートル）というが，その名前のように大木を伐った伐株状の形をした特徴的な山であるため，誰にでもすぐわかる。この台上に玖珠盆地の家をすべて集め，盆地は無人の平野になったという光景を想像すればそのままイタリアの山上都市の風景になる。このタイプはイタリアでも特にウンブリア地方に多かったが，トスカーナ地方などで見られた山の中腹にあるものは，英彦山とほぼ同様のタイプと考えればよく，共通しているのは，人は山上に住み平野には人が住まない田園だけであるということ。家はローマ時代からの石とレンガ造り，小学校から中には大学までを擁するものもあり，教会，美術館を始めすべての都市機能を備えている。日本人でも特に都市計画の専門家らは，これらの山上都市にやってきて，これを現代のまちづくりに生かすべき研究対象としている。この山上都市の感動的な光景を目にして以来，山上都市英彦山の再発見をますます考えるようになったのである。“ひこさんまち”は英彦山のヘソである。山も山麓もこの“ひこさんまち”を主体としなければならない。ここは凸型景観→男性のイメージの中にあるといったが，ここには，他では見られない良質の景観要素を極めて多く内蔵している。これらの素材を有機的に結びつけることを工夫した時，“ひこさんまち”は再びよみがえり，人々に安息のイメージを与えることになるのであろう。そのコンセプトは，英彦山の持つ歴史遺産をいわゆる凍結保存してそれの恩恵を消費するというのではなく，まず住民の生活の場としての表現から始めなければならない。物的遺産の学問的価値にとらわれるのではなく，たとえば，坊跡に坊を復元出来なくても，旧坊の石垣が参道からよく見えるように藪を除き，昔ここに坊があったことがわかるようにする。家を改築や補修する場合は，正面だけでも旧坊の面影が少しでもわかるようにする。庭園も開放する。現在の閉鎖型を改めて，参道の両側が通りに向かってわかるようにする。また，1枚もののテクテクマップ（地図）を作り，参詣人に配布する。まずは“ひこさんまち”を再発見しようということで，それが文化財に指定の有無は問題ではないのである。

参　　道

ここにはそうでなくても文化財級の遺産は羨ましいほどあり，かつ，自然条件にも恵まれているのに今はすべてが眠っている。これまで見逃していた“ひこさんまち”の歴史や記憶が刻まれている痕跡でもよいからそれらの発見と開放から始めようというのである。

護摩焚き

以上，これまで述べてきたものは，人の視覚的イメージによる英彦山の景観を論じたのであるが，一方，人には小さい頃から体にしまいこんだいいかえれば原風景といってもよいものがある。また，古い歴史を内蔵した風土や場所で，その歴史をしのびいろいろなイメージを描くこと，その場所が昔と変わっていたとしても，その場所に立つことによって，人は昔の風景をあれこれと描くこともできよう。ここは修験道の山であった。若い夫婦がなぜ登るのか，疲れたお年寄りが杖にすがったまま石段の途中でじっと休んでいる。この山が山伏で栄えた所ということを知って以来，それはどんな所なのか，石段の上を見上げながら，上にはお宮があるのか，お寺があるのか，そして山伏とはいったい何者か，まだいるのか，えたいのしれない気もしながら，そのうち山内でそれぞれの季節に行われる護摩焚きに足の踏み場もないほど多くの人が集まるあの光景につながっていく。立ち昇る火と煙に人は何を見ようとしているのか，世の中はカオス，例えばそれが形で示される信仰でなくても，自然信仰の原始風景を感じたいという思いがし始めるのではないだろうか。修験道は人の心の原始に帰ることから始まるというが，それなら極めて清浄な話である。ところで最近の景観学には，Soundscape 音環境の概念の導入によって，その土地の歴史や当時の自然環境を再生しデザインする手法，すなわち音環境により風景をデザインする手法がとりいれられているが，この手法は今，“ひこさんまち”にも無縁ではないようだ。人は石段に佇んで，この山の歴史・イメージを辿り考える。そこには形として表現するものはなく，心の中で描く“風景”を見ようとしているのではないか。ところがここにきて私はこれまでのべてきた風景が，信仰の歴史を終わって現在休息に入っている英彦山に対しては，いわゆる通常の風景なる言葉がなんとなくそぐわないような気がし始めた。すなわち，私が“ひこさんまち”でみてきた凸型景観の中味は，通常の生きた景観論とはやや違うように考えられることから，ここでは風土論的景観とでも呼ぶのが相応しいように思われ始めた。